



源氏物語

下

二共



研

しものれもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
わらうしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん
しゆんしつとくもれはかきしつとくもなるにいとくしゆん

五箇文庫

伊豆益

五箇文庫

久あらずまよひぬれはえぬまのふは年と大粒あての
ろき板屋くれきふみしてあふたうぬらねあれとも
よりて幸ふふけくきねあらは禮儀レイのそれりり
くまね史長人の宮庭をやらふをひそあ言とせぬしそ礼
儀と清島所まづいりあつてその庭の舞をさくらん
ころ人ときこえまねたあのありれちりあさけく
まふおられまふ人と尺くありこふあふ夢ようせし片
ひてのちか書いにもぬーをぬふはやう一筆を
か書あしてすけけひぬまのハカ一の紙なりあのも
このあなとねしきふぬゆも意史のうらさぬ

大粒のころのをぬくそを何事も清くみとぬと
あゆのうしあてみくは氏よてえぬ是ふの...あつり
て何とあふあふいしあぬれくして用政あふらあつ
りてはあふもまふあ人とまふあしりあふは侍あ
作文第法よと一しきくまふはあゆあもみしり文
字をまふにしてる馬あもうしこのぬ人と尺えしり
生質仁厚あして人とほてまぬりすけあふは長あを
か一也あつてて代あてるをとほせよりまふしああ
の事ありまふあはほせまのけしりくともその
そのあ事あをよりあつめ一知よ書つて後くまふ記

竹久文通の書

と見られた世の ありやう也又武國の款をみせ
て初夕軍ありていとや け被あれともその書
多事やみて知て後世の世としりされん我々の
たにら馬さうふ及らん文書よそのふをそとら
る合我の中のことらつて書しる記がら書きて
たさうふもゆは源氏一はぬ人のかうふゆわ
はつりそと人の交りもなりやいの書しる
とみらるるのたのいもる
おんさしきもまいつりめんとみらるる
あてしる

けは微衣のあつた只人の主婦の中定しうぬ
ゆるも也とふあつた后女も女もあつた
ちうはけをもあつたは是非なるわ
よりはらうとあつたは是非なるわ
陽さのくはれそそのおはれたれの是は禮のま
あつたは是非なるわ 卑免るる知仁常
たつたは是非なるわ 是非なるわ
ゆなけくわ
清位おはれせむとあつたは是非なるわ
まつりしるは是非なるわ

何と云つて

今を難ふあはれもみうれを念ふくらばるあ
せれぬうはれを事づく成を一人はさふ
事の人をしられは事少くありうしは
ちより亂れしつあを多めけ一人人倫の
不変し事乃難ふいし事あり
はのけりのみ宮乃人かあなりし事あり
あはれし乃たう事ありし事ありし事あり
必あはれし事ありし事ありし事あり
此乃遠征と記す事ありし事ありし事あり

みはれを念ふし事ありし事ありし事あり
れと記す事ありし事ありし事あり
よき事をし事ありし事ありし事あり
店と記す事ありし事ありし事あり
うし事ありし事ありし事あり
この事ありし事ありし事ありし事あり
せし事ありし事ありし事ありし事あり
大なる事ありし事ありし事ありし事あり
格と記す事ありし事ありし事ありし事あり
一人はさふ事ありし事ありし事ありし事あり

まじりては徳殿の后をたはしむるをその人なり也
されど大后の御心はそれこそその人ばかりの長くあが
けしてこの世あればと世とのあはせしむる金瓶
の小人多しと云ふはうらとてめ程に思ふ程なる
まじり一事の世を以て金瓶の書人としてか
く程よあらうと云ふは世を以て金瓶の書人よおほ
のゆかゆそむるまじりのことなり
よめあつたのときもくちあつたのときもこのれ
あつた

車あつたのときもくちあつたのときもこのれ

かろく一人情時愛と案してうととほめたる人
とはみここれよと神かひこくたれめきた二条
右大臣の梅よあつたうらとてめ程に思ふ程なる
右大臣のまえくはよめきた二条
也も大后のまえくはよめきた二条
あり大后を右大臣の御心はそれこそその人なり也
相壺乃帝の御心はそれこそその人なり也
おまじりのまじりもくちあつたのときもこのれ
たつた也大后を思ふはそれこそその人なり也
はあつた

そのまゝ人くつゝとあるは極いあまのりや
及一人もたかくのまゝとあるは極いあまのり
たまらふうゝちをせぬまゝ

け附分文學をせんらうしとみくありきこのゆゑを
らうらうとされむわふとあましくかくし極なりあ
乃つてふんやうみえぬまゝとあまのりやうゝと
知る人ふとまゝ人の文書とあまのりや

源氏三位中納言と博文の人のとてえあり
あまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや
ら花あまのりやうゝとあまのりや

あまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや
い極なりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや
一人のあまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや
みまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや

文章の子やこのあまのりやうゝとあまのりや
のまゝとあまのりやうゝとあまのりや
一わうと文章のあまのりやうゝとあまのりや
ようみまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや
まゝといつたあまのりやうゝとあまのりや
あまのりやうゝとあまのりやうゝとあまのりや

源氏と御月夜との事古き臣の後きとちりふ
迷ふは御夜の心と念のつらさをさるる御
しるべき事なきにちり

須磨

そ中つとちりつらつらと御月夜の御心
めしるる御夜の御心と念のつらさをさるる御
迷ふは御夜の心と念のつらさをさるる御
しるべき事なきにちり

あつ人のふらみと文又まわりのふらみとちり
つらつらと御月夜の御心と念のつらさをさるる御
迷ふは御夜の心と念のつらさをさるる御
しるべき事なきにちり

所より其のいふ事、罪をおとせしむる事、
天子を弑す事、
人倫の乱る事、
今世の中、
世の事

いふ事、
是れ、
くして、
り、
かして

かして、
いふ事、
いふ事、

いふ事、
いふ事、

韓退之作、
文、
を、

路の事もはけくお入つてきて一歳概のみおこり孝
心發おはる一後世に傳はるべき人の目と發せう見
おのめりうと知る事よめ一人の一人也古傳業
乃凌ち今お傳へる後光嚴院後圓融院と代々の
清養あまもね塔中といふ事もわづく只ね柏或は付
大寺植たち斗也あといふ事よめも只ちのみさうて
人のあまく申す後世の秘傳さするはと縁ゆり時
たありあては秘傳くくつて本名取と有りあはうれて
氣ち多秘おぬと也と代くは孝孫とあり也後世よ人
らなういかりむち人の人の海子小とらうに

あり一海ありさういふもえりあは
とよまいまはのちく孝子のんを親とれとらうに
かゝる難ふあひきを海時とまよふよふま一つらうに
たまふ実の孝心一入るるる
おせい
今この風俗より源氏とみれた大おり一まはうとされと
もまきの内信とみえたりと代おもかゝるて名取のこ
と一にありとみえきれともそ何とちとせとやと
みえり源氏好遊のち流ふ平とありありあふ人の國の
申言の事まそりほけていひたら事よめ

しとめとしを女梅のたーあゝあゝ人き悲事この也

恩賜の湯衣今ふふりうとま中つ入るふひぬ湯を
ちほふしふれをたれしひうらうふ

女人君さうわとせぬ志を好ゆ也香廊ほ氏もふ

と根忠臣のぬめとぞぞと君とわされはちと女の方

風そやるうとらうし人もあしちりぬとんま園と

い部一と是こまよとぬきまのまけ色も湯衣とぬいぬ

あつり昔西相の侍ふも手今兼竹清涼秋思江篇揚

函腸恩賜湯衣今生此捧拍毎日和紙香香イ

よまはのあしほまわりみあふしーらぬまも人乃うし

おもみあふねーしうしつううぬ湯ふ先は常ま

ふれまふらうやーぬふさきま是女信の人と氏の方

母すれハ袖乃とわさえわさるるるりて念ぬあま多

あつ幸ふぬる敷ぬぬあひてみあふもまらとらぬ

のぬと念ぬあま多る也文小過てあふとあくちりは

しふら家の天下の格とまひひまいしーしう一羽一夕のま

ふあふぬのチイん猪ーくけたらふと利強なりけあつ

ふ強し威あつし高人ふらとまもん利もあつ

ぬぬむあま記しーは清白乃んらうは色えするのう

ふあて面白あひいあし

よしのはらうららしていきさちのうのよのよの
くわんざいしきんふをふいのしおとらひちの
まんのまにゆれた
ら義とあられをさふうに神也あらんまてぬ也ふ
わういひの神位を今よりする所のまゆまを
んおれもつあましんおはてまに身のまゆまを
まゆまをあらせまをまゆまを今乃時あま
源氏のあやまらあまを

明石

程風ぬやまの神ありまをまうて
弘徽夫人の御位の高らむことまゆまの
うめふちぬ雷風考うらして久しき也人の衆ふ思
われまゆまの神位もあまをふくまゆまは天の意
左大臣の御位の高らむことまゆまの
うまゆまの神位もあまをふくまゆまの
天下の人あまの神位もあまをふくまゆまの
あまの神位もあまをふくまゆまの
りてまゆまの神位もあまをふくまゆまの
聖もはらうらしてまゆまの神位もあまをふくまゆまの

あつて一冊一冊と見せられてみることはやゝ後世の
その人品を思ふ人^文も一冊一冊と見せられてみる
うゝの人情に於てはあつて一冊のあつてみる
ハ業西の事

於此れより少くも山を求めてんやつとくちの
ほはしは後世の人はいふにやんと人の心は人
あつての事とていふとあつて一冊と見せられて
言ふに後世の事とすなはたその時とていふ
文と一冊のあつて一冊と見せられて一冊と見
あつて一冊と見せられて一冊と見せられて

それとも自らいふと一冊と見せられて一冊と見
君と君と一冊と見せられて一冊と見せられて
あつて一冊と見せられて一冊と見せられて
生質仁也といふ人あつて一冊と見せられて一冊と見
上層とていふと一冊と見せられて一冊と見せられて
一冊と見せられて一冊と見せられて一冊と見せられて
あつて一冊と見せられて一冊と見せられて一冊と見
人乃英^文といふと一冊と見せられて一冊と見せられて
般意^文といふと一冊と見せられて一冊と見せられて
といふと一冊と見せられて一冊と見せられて一冊と見

力のえわづれまのそと権とあけあして城一なりお
 とうに美もも燈籠の^{てん}るふありけきあ午生息正
 和歌をそは揚ねる人ありさけあふ死して不亡りの
 政もあやまこれ神明ふ測の理也ま所の外は樹のまひ
 へあふ力のたきて衣櫃のふふはてまうかともま
 う種ふうつりてりえあふ終とあり
 心あふのねともや一甲そよのふきぬつ〜はま〜つ
 たろゆち〜ま〜む〜う〜お終せよとせ
 人ふあふまを利るし考人まふ老人のいふあふれあ
 白まゆのま〜うあはす〜と〜あ〜とあ〜人む〜と〜いあ〜あ〜

かの終〜い〜や〜あ〜ぬ〜人〜う〜民〜あ〜あ〜ら〜あ〜あ〜あ〜
 らんま二入政道ふ物あままあ〜海氏とあふまの
 御〜う〜ら〜あ〜ま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 き〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 人情実ふま〜う〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 乃いさぬいふもあひのちり〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 是れ女の子は〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
 るら〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

第廿年わつこもあつてやううれを時より披露
 の方とほつきをうのうらぬ也やうりあつたにわよ
 格もあふしやくとさあつて糸と糸と別さうぬ
 ざふあひまふまふとのをわやのえぬあやにうしと第
 廿一上まあるるも地は格カゲのえぬ也十丸すまのさ
 てはうう奇蹟あまえ又男の方とほまはうらぬ
 九年イ
 あつてしうりまあつてぬても労働人乃ちあつて
 およしうらぬしうましまけらるるの目ふりさるる
 うりいゆけさるものあふりらるるのあつちらるる
 久人ちあつてぬすうて替た乃方とほつきをう

小
 の格あまもさ曲ももあつてあつてあり何の舞も
 あつとんおけされたうよとえあつちらぬ也
 てはあつていふをうあつたはあつちらぬ也
 了ゆらたのも地なたり十のあつちらぬ也
 たりゆらたのも地なたり十のあつちらぬ也
 ちくしてゆらたのも地なたり十のあつちらぬ也
 てた人のん格もあつちらぬ也
 君てんはまきえぬの曲とたうらぬ也
 色とあつちらぬ也
 有必しも第のうらぬ也

ふまゝなるよ人の自ら格とらんより我を
ひのぬ人のらゐるがしつゝ人ふらゝゝあてうら
みあゝらんよのあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
り也いことあゆむ像語一ゆふわ^てまきまはん
虚あてゆ也ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
上の父た長之代ふ功ありゝゝあり海氏あゝゝゝゝゝ
人あねの恨とまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うぢぢぢ

致仕の大臣後近の申あしあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我今あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝ

てまのねのねあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝ

二条院あも

是人格とあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
盤とあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かりた今いやーのさるありのありきちる人ハ言籍あり
 思あてあと報せんとつるもれんある人ハめいとく
 さひるえあまいれんを思もつてなれるをゆえにしの
 んをまさるありぬ子を使えて使ふむしいをとて
 然不報のたりりはるん取し保氏とれのた取
 又事らさといてしらうにもめりぬらば也語自に
 院の山松の内府ふあらんを思こつて報とつてしらと
 のいひらひもまま然るんをととくして又入道となる州
 せらせしハそ理とあらふして常身のように申とぬ
 むおあれる保氏の付をたらぬらひしらうとしてた取

小つ〜く〜り〜ぬ〜し〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

兵部ののみ
 紫と花とあり

須磨へ保氏らうらひりの村名部々官々官々のように
 とらひありぬ戸ひひき屋々あらうして也江國屋
 大后切とはらうりて人を信としらる自然の為
 所をままあれるを也としてままある人情のゆえに
 又何れも部郷ともあらひぬりひても保氏
 の所官の出るらうあらまうしてままにもありたま
 ひらとまいしはらぬ也といふして保氏の
 らみもさらぬぬぬ也

未だ心なむあてはれずもめりしはるゆえ幸とぬた
たり

とよしやありのうらあち

まはしのをえれるとてんをまた母よあかしの
人の事よりついに母の事へのんは受取ぬしめ
ぬ乃人の事申中やこのおとある中へ位を
とらあまじとらちか——まゆとぬいんをたじり
るありけ未橋花乃あふむるしはた乃あまじりちる
加よやむとら工の物形の——あまじの定給ぬとの
書ふ來てんもすい——とあしりいん

人跡なきよはらち中へさるゆか——ついでに
たえあしり——にGardenerのMansions
の事よりついに母の事へのんは受取ぬしめ
ぬ乃人の事申中やこのおとある中へ位を
とらあまじとらちか——まゆとぬいんをたじり
るありけ未橋花乃あふむるしはた乃あまじりちる
加よやむとら工の物形の——あまじの定給ぬとの
書ふ來てんもすい——とあしりいん

衰をうけはききあ家のふみてまうはけうはふし
て類あつしちたをわししりやぬりの也年生まはの
みわりりあう格おれしひふ義理のちりいり人
妻ふあひてさうき也衰をみきては格路みも積
義の性年の中い求ひぬ也乃人か也のふふき
はゆふきゆたれたあふととてさか二度あつし
まはぬ也りさぬの人はうしむぬきまつじをほ
のみをせんぬりえちち慈仁のほふを也去格富者れ
人あふえあくまはけいふみあがりうとまうめま
一こぬ也万想一慈心格とらぬうほ女のふの

けうえんあうちんゆを也

園屋

海は野とあふくして功をありく一海軍も也
あつりてはち美か一れまはちうい少をさかち
ちのちちあまそれとさうめては学ふ人もあつし
さしてさかちち志己らち一も事いちちてこのて
人をけいさ修とけちの也れ格ちあおあとして
あふうちちぬうふふい一と奇格也又あふふ
ゆをいづめて格修とまふちね也と像の格修と

夫歸をねきそ那の位在たる命一にうさるのち
又折く乃のちりとははのまわし
ぬえ上のりなき事叶^{サイ}はせ申す家ありといふつら
そのまはしむらばく老文のみまのふりりあつたあ
る命一文且乃后妃もその位とあぬ終一てら
國をあらそく父母を降寧しとる命一あつりんせ
一の者行しふありあつていふ家まといふとせ
いふとせとありにきしりふをせとていふま
てうろくあつて終ふ國とてまらあ^まあ

萬雲

娘君をとりておちいせしつていふとせ上のん
をわし^し志^ああ^りて
あつてのんかまをいせしつていふとせ上のん
かまを奇物の事也文上の后妃とあまこの女中との
いふとせいひたつはちをまはせあ及と補む夜
後^しし^なも^とれ^くい^ふと^せあ^らう^ふい^ふと^せあ^らう^ふ
神一うえあやちを父母のいふとせをいひたり自^ら
ら^の事^をあ^らう^ふと^せは^はあ^らう^ふと^せあ^らう^ふ
中^を教^えら^うけ^るあ^らう^ふと^せあ^らう^ふと^せあ^らう^ふ

後をまらぬものなるをのほりあへる
ら考人の遺世所産と云々乃人の小くし
申ふんをまゝしつて居るはむねい
右のようなるは

ほりておはして人のまゝおしつて居るは文
御も小産と云ふとわけも文意を考へて
ごらるや一編一巻おしつて居るは
り大考のしつてあり是れ家のもの
くしつて申さるまねひて人ら
るゆゑ也後世の書は人のまゝ書
あつていふやふやうに後世も大か
候とて後世の人も申す所の
あれは申すは一巻一編の
校の申す人も其家のもの
せんとの事也

けりつていふは
けりも今も申す事也其後
何れもよく後世の事
てけりつていふは
いふ文大考のしつて先も
後世の事

わが堂上の人の留まりを承けしめてゆく事
つとめおのりふくせし能く増え栄ひつちの事
こころのふくむ事かきつとめあはれし事
哥の謗としつとめあはれし事
ふくむ事かきつとめあはれし事
大かき唱奇あはれし事
ふくむ事かきつとめあはれし事
あけし事とも若ふりぬえはれし事
人を擧又退却とは多しと人力の極あれし事
ありあはれし事ある人今あることあを廢せし事

まゝあつたを返けても人かともや也福後ある
今一日あつたもあつたもの事
くをてし事あはれし事
まゝあつたを返けても人かともや也福後ある
今一日あつたもあつたもの事
くをてし事あはれし事
まゝあつたを返けても人かともや也福後ある
今一日あつたもあつたもの事
くをてし事あはれし事
まゝあつたを返けても人かともや也福後ある
今一日あつたもあつたもの事
くをてし事あはれし事

幸と云ふおふらむらと云

玉鬘方

あつて人た利敷おふらそなたる人うらまうらうは
^兄通たるといやあひひまうららるるえみ若一やと
地敷おふら性を性といはせえ男よりうら一と
いふしじま也人元利敷うらそなたる人うらまうら
あふらうあふらう一とあひひまうららるるえみ
中そそらり多人の此係をその女あつらうら一と
あつらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

さー夫中人えはつらうらうら一人ふあつらうら
^は大女あつらうらうらうらうらうらうらうらうら
ひしうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
^は下と云

初音

はとらうらうらうらうら
今自然不威るそふをうらうらうらうらうら
和はうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

孝夏

男女のよのせむらふ家根も家月も此世とあり
して能くあつらふもいふ人してあつらふ
よのそつけれもあつ

篝火

よのせむらふのよのそつけれもあつ
よのそつけれもあつ
よのそつけれもあつ
よのそつけれもあつ

わさきとわさきとわさきとわさきとわさきと

野分

世あつらふもあつ
春のわさきとわさきとわさきとわさきとわさきと
只今とわさきとわさきとわさきとわさきとわさきと
あつらふもあつ

行幸

わさきとわさきとわさきとわさきとわさきと
わさきとわさきとわさきとわさきとわさきと

改めておふとさういふ一ひらいたんをさうしては人の心
 とは中国よそほ乃母はあやまりおぼかりりあつては
 原氏の時さうもいし一ちりいさとなえまうおぼの代
 とあり振平と平氏なるふ原としお朝の原氏のい
 とくよりれ一あやまらうと傳して後世もあつし
 ちやあ者の時とあつらお望とらのれを原氏代時ま
 てよりあふち上左のさあのうりてはあつたり
 たてさうとさむし一より
 内大臣のまはれとのおさるなり一交つこうれさうハお
 世あつし世と世情のさうはささ地あつしお望とくあま後

さのまにわふといひあつてはあつたり人の心
 一おあつていもさう一おあつてはあつたりおさ
 ともあり内府もさあつたをさの理あつてはれさうさ
 さうのさう一さういふいふいふお望とくあつたり
 はれるさうさう一お望とくあつたり一お望とくあつたり
 あつていふもお望とくあつたり一お望とくあつたり
 無錯なり一お望とくあつたり
 一お望とくあつたり
 先了をさういふのさうと書まう海氏のさうあつては
 ぶらさうは内大臣のさうと書まうさうと書まう大君すあつ

ういへばはふりて聖人なるもの身みしきりしるべきあり
胎女胎の定りもよ敷のゆゑのまはしうの今と縁あり
花のれくふはげしてをさそも人うらやましくおひひ
やえーのいぢたあふりれーまたいぢたーいんまゝに
日むの海芽一のまふりれんと成徳素の可うとあ
らして入おとむまじあー是和の徳をこととせし
未代又備りてをそ一徳徳やわーうたあり成男おままら
きりちけふあうりてをそまどー男女わたたけを極ふてか
いふへいそまをうりてみるるーあうー考徳と徳を
たふとあういば人徳といまーく一徳と徳と徳と

いしてんきのみをうけはとあれたはれをいまうり
源氏あいの母もうりあいの司ふとあうて言を
あひさうれいも言のちうりも禁法もあー縁あり
ほいのもあてをいひあてよきーはとよままひ
思はてぬ人徳ありまねたといたつれと徳あり
うり今一白世聖人の徳を何ともさういふふてまの
きまをえあうのそあはえつはまうーいことあま
ありあうよま徳の徳あまそのもあてあー徳とよま
をーいそまうあひくふまーいあをうりあてよまの
あまあうり人ともいあはちりーああうーああ

かの男女の情欲を以て國を治るるの道なりと云ふは
そのまじき法也といふは其のまじき法也といふは
はとひては情欲も男女のまじき法也といふは
小まじき法也といふは其のまじき法也といふは
かまむのまじき法也といふは其のまじき法也といふは
所日むと我國ある故に常あるまじき法也といふは
後禁制を以て後自然のまじき法也といふは
かまむのまじき法也といふは其のまじき法也といふは
まじき法也といふは其のまじき法也といふは
まじき法也といふは其のまじき法也といふは
まじき法也といふは其のまじき法也といふは

を以て其の爲に事あるまじき法也といふは其のまじき法也といふは
の政に男女のまじき法也といふは其のまじき法也といふは
まじき法也といふは其のまじき法也といふは
のまじき法也といふは其のまじき法也といふは
時を以て其のまじき法也といふは其のまじき法也といふは
かまむのまじき法也といふは其のまじき法也といふは
はとひては情欲も男女のまじき法也といふは
小まじき法也といふは其のまじき法也といふは
いひてまじき法也といふは其のまじき法也といふは
かまむのまじき法也といふは其のまじき法也といふは

通賢しく公役を欠にやれり止む大才小才富
貴をいふは唯男女の徳のたらしむるを命せしむ
き拙大才をとも通しきまらりしりともさしし
かたもはしきまりしり男姑本はくしりのふま
ふも貴徳の徳ふとまらしきとれとも人うら
ふそ丹られし一箇ふとさしきしきさうあ
しきとあひひつふあふとさしきとあふりて
けりし人さしきあふとさしきとあふりて
とたうてかりあひりしきとあふりて
とたふ小才をいふれりていりし徳小才う
とた

小あせきとふの世今おとらふはと盤殷勤ふりらる
ほととせきあしき代のありぬかしのひとらむ
こそ人のさしきあふとさしき

次ふしつるをくをら一れ者しよ高辨たれ海あれた
地と地とさしきあふとさしきあふとさしき
きはきとさしきし人さしきけりる人日通はたれ
と下平ららなりしものさしきして用ふといら
とむ人掃あふ屋しき座ぬあふとさしき里たれ
あふのあふとさしきとさしきしてはひし
あふのあふとさしきとさしき

大母中も親の事おぼし〜
つ〜
て又力のよき形もあつても時をね〜
小おしり埃のやめぬ人をお〜
さんまおしり大お〜
小あつりてあつ〜
くて時を〜
君よおれぬ〜
丹小人の儘を〜
学問もあつ〜

〜を〜

中おも娘君のあけ〜
い実乃娘あ〜
のよま〜
きを〜
小は〜
をり〜
ひま〜
もろ〜
と〜

らず、^比しつらうと見え、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
か、^比しつらうと女君が、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
らう、^比しつらうと女君と、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
ふらうと、^比しつらうの^比れは、^比しつらう

おと、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
か、^比しつらうと女君が、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
らう、^比しつらうと女君と、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
ふらうと、^比しつらうの^比れは、^比しつらう

か、^比しつらうと女君が、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
らう、^比しつらうと女君と、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
ふらうと、^比しつらうの^比れは、^比しつらう

か、^比しつらうと女君が、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
らう、^比しつらうと女君と、^比しつらうの^比れは、^比しつらう
ふらうと、^比しつらうの^比れは、^比しつらう

加賀守の御書今の人々大くは事なきにせむと云ふは徳の
みはる小鬼神の言をきかしては奴ら徳の御書はる御書を
ひらけしして去揚つるもの也たといふ福をうけうけて
しはめのんはあつてはぬいふ事つるもの也平氣
とうはまゝ小師はる御書はるいひしゆ事なめの
おつりと自友のあつるを奇物なりと先程の善徳の
感念遺徳の念うよそ福福のたまひちつひつるま
せありたうよは今の人の心と行つてはてうくま
しくもあら事也徳氏の力のゆゑとらふいふ事
二がらふ事徳の御書はるいひしゆ事なめの
かゝる御書はるいひしゆ事なめの御書はるい

るをたのみめしてのまゝいひしゆ事なめの御書はるい
君の御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
かやいひしゆ事なめの御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
けいしゆ事なめの御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
いひしゆ事なめの御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
いとあり御書を御書のまゝ小師はるいひしゆ事なめの御書はるい
御書はるいひしゆ事なめの御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
いひしゆ事なめの御書はるいひしゆ事なめの御書はるい
くとも和守の人々大くは事なきにせむと云ふは徳の

蘇をそひて後世の名をうく考し百中も
ほみやう絶力のいさも

伊勢太神宮の佛法をいひり事なるに國をいひり
佛をとも井子もまはりていひりていひりていひり
うらふ少れ塔にあゝいひりていひりていひり
うひ兵元えめつみちの味はういひりていひり
いひりていひりていひりていひりていひり
おのみをもぬく

念佛といひていひりていひりていひりていひり
の学絶り佛法のいひりを絶と有西南の住え人の國

とをいひていひりていひりていひりていひり
てとをいひりていひりていひりていひり
やいひりていひりていひりていひりていひり
後世をいひりていひりていひりていひり
かゝるいひりていひりていひりていひり
くいひりていひりていひりていひりていひり
いひりていひりていひりていひりていひり
ういひりていひりていひりていひりていひり
いひりていひりていひりていひりていひり
の絶りていひりていひりていひりていひり

うら—申明書

明書

帝は此れをうらなひて—あつておひつて—とておはすと
わりぬく

南今の母后代治氏の母を交うとありぬいせぬ
御下治氏まるとありぬいで以て人車等の治代^の治
う—ろみと定りしれ、春文の治代^のとらそとてあか
の通ふありと淡—むい—也、ゆゆの—の—の事をつお
てふして書紙と割りりむく—也、通ふ飛らほはせら

かち申上申し—其の後の言をて應はしとちかぬいしと
おる治氏と帝との治もよふて於又治あつて—ぬ
おうせむも—と才をたてられてその治あもあつ—
は、是をうらなふと—と親のあもあつ—むり人治あく
して—あ申上—ハ—あむい—也、仁也あつて人^のまた、
とつめる—もあつぬい—きん—あつて—也、ぬい—
ひ—の—あつぬい—もあつぬい—もあつぬい—は、
のあふ申上—は、生れ—ぬい—ぬい—もあつぬい—
あり仁也の治あてぬい—ありあつぬい—のぬい—ぬい—
—されぬ—人もあつぬい—もあつぬい—た、ぬい—ぬい—

とて皇位を譲りておたがはる弊をたふさうつらとての世をこれ
もん宿願をたふさるを望み人をもいふるの信とよらふ
—とて世

何の延喜の御もよりいふはしむるはとて文をさす
いふ—とて世をめぐり樹下を立寄るをいふ—とて世をめぐ
る—とて世のなとをいふとみえたる

今俗なりとていふつく—とて世をめぐり—とて世をめぐ
りもとて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
の事とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
いふ—とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり

世間—とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
の世とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
をいふ—とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
の世とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
帝君代後代をいふはしむるはとて文をさす
入唐の父大臣をいふはしむるはとて文をさす
はしむるはとて文をさす—とて世をめぐり—とて世をめぐり
をいふ—とて世をめぐり—とて世をめぐり—とて世をめぐり
はしむるはとて文をさす—とて世をめぐり—とて世をめぐり
おけむはとて文をさす—とて世をめぐり—とて世をめぐり

いきしつめを撰らありて大正の形も不通してよく
似たてまつりきりしれを何とせしむべきをせしむると
なりまを各本は氏等の物の言ふとも異なるなりと
もあられましきふなりとてやのむは氏も又たお
のんをとりあつて此石の如くはてしなくいふなりとせしむ
大正氏等のの言をいふともしやうなりとせしむ也

右源氏物語抄云々無澤了故云所作也曾聞
全初云十四巻各抄由之中院内相通名潤也之目
擇切於時事を為す冊也全部之平

各冊内相自以朱批校之本云執齊之本敬寫畢

